

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルタルコスを中心に——

(V)

『アントニーとクレオパトラ』論(その二)

アントニウスとクレオパトラの恋(続)

木 村 輝 平

クレオパトラ

今日は私の誕生日です。

つつましく祝うつもりでしたが、いつものアントニーにあなたが
お戻りになったので、私もクレオパトラらしくいたしましょう。

(3. 13. 185~187)

(I)

恋愛も人間関係の一種であってみれば、当初どんなに強固な結び付きと見え
ても、長い間には紆余曲折を生じ、二人の間に冷たいすきま風が吹くようにな
る場合も往々にしてあるものである。

アントニウスとクレオパトラの恋愛も順調な時ばかりであったわけではなく、
運が傾くとともに二人の間に深い溝が生じて行ったし、それが果して最終的に
修復されたと言えるのかどうかも疑問なのである。また、よく言われるように
アントニウスがクレオパトラへの情に溺れて己のとるべき道を誤り、人々の信

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

頼と期待を裏切り、自らの没落を招いたのも事実であった。

前回はアントニウスとクレオパトラの恋愛のいわば輝かしい面を見たわけだが、今回はその裏の陰の部分について述べてみることにしたい。話は当然彼らの経歴の最終部分についてのものになる。

前32年、アントニウスがカエサルの姉のオクタウィアと離婚した時、ローマ、イタリアでのアントニウスへの支持は急速に衰えたのであったが、エジプトの富を背景にしたアントニウスの軍隊は強大で、カエサルの軍に決して劣るものではなかった。したがって、アントニウスの没落の原因という言い方をすれば色々な原因が挙げられると思うが、そのもっとも直接的なものとしては、やはりアクティウムでの敗戦ということになる。そして、この敗戦には一種の謎があることが知られている。

この戦いでアントニウスは戦いの最中、逃げ出したクレオパトラを追って自分もその場を逃れたと伝えられる。シェイクスピアの表現を借りれば、「あの女が舐先を転ずるやいなや、その魔力に高貴な己を失いしアントニーは、帆を翼のように広げて、雌の尻を追う雄鴨よろしく、いまやたけなわの戦を捨てて、女の後に続いて逃げ出した」（『アントニーとクレオパトラ』3. 10. 18～21）ということになる。

しかし、以前のアントニウスの武人としての行動ぶりと比べて、また事の重大性を考えてみても、上の事柄はそうにわかには信じ難いところであろう。本当にアントニウスの行動はそれだけのことだったのか、それとももっと納得のいく背景があったのか。ここでは、「アクティウムの謎」をもう少し詳しく考えてみたい。

主な史料としてはプルタルコスの『アントニウス伝』（61節～67節）とディオオの『ローマ史』（50巻）の二つであるが、例によって一致する部分と相違する部分とがある。

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

アクティウムはギリシャ西岸のアムブラキア湾口部南岸にある。海戦の前アントニウスの軍隊はここに布陣し、北方に位置したカエサル軍と対峙していた。湾内には彼の主力艦隊が健在であったが、当初彼が他に設定した海上交通の拠点はアグリッパの指揮するカエサルの海軍によって次々と奪取されてしまっていた。アントニウスはカエサルの陣に陸軍を送って包囲・封鎖しようとするが、結局失敗し、元の場所に戻った彼の軍は海上からの補給路を切断されていたため、逆に封鎖されたような形になった。彼の軍はまた、糧食の欠乏に加えて、低湿地のためマラリアの猖獗にも悩まされた。そして当然、この状況では敵方に走る者も少なくなかったのである。この窮状下でアントニウス軍の取るべき方策が求められ、陸戦から海戦かあるいは退却かというような議論がなされたという。

プルタルコスによると、陸戦を主張したのはカニディウス (Canidius Crassus) であったが、彼の考えはクレオパトラを送り返した上で、マケドニアからトラキアに撤退し、そこで決戦を交えるというものであった (『アントニウス伝』63節)。このように実際にはアントニウスの軍がアクティウムで陸戦を挑んで勝利を期待することはかなり難しかったのである。したがって、アントニウスが得意の陸戦を捨てて、海戦を採ったのはクレオパトラの言葉に惑わされたからであるという見方があるが (『アントニウス伝』62節、『アントニーとクレオパトラ』3幕7場)、これは必ずしも正しいとは言えないようである。

プルタルコスによると、クレオパトラは海戦を主張して容れられたものの、じつは逃亡することを目論んでいたという。しかしディオによると、クレオパトラは初めから船でエジプトに退却することを主張していたことになり、それもいくつかの不吉な前兆を心配してのことだという (50巻15節)。逃げるについてはアントニウス側の軍船は巨大で帆を使えば足が速くそれだけ有利であった。したがって、この場で決戦を避けて、エジプトに戻って兵力を再結集する

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

ことも選択として可能だったわけである。

ただ、こっそりと逃げるということは味方になっている東方諸国軍の士気を損うものであるから、カエサルの海軍と矛先を交えないわけにもいかなかったようである。というようにアントニウスは海上に活路を求めたものの、戦いにはやや中途半端な気持があったと思われる。彼が戦いに臨んでこの一戦で雌雄を決するつもりであれば不要なはずの帆を各船に積み込ませたというのもこのことを示すものであろう（『アントニウス伝』64節）。

アクティウムの海戦は前31年9月2日に始まった。アントニウスの艦隊は大型艦400隻余りで、左翼、右翼、中央の三編成で湾を背に並んでいた。一方、イオニア海側のカエサルの軍もほぼ同数の船を同じような編成に分けていたが、軍艦自体はセクストゥス・ポンペイウスとの海戦に教訓を得て、機敏な小型船であった。クレオパトラの船団は展開したアントニウス軍の背後に控えていたという。

戦いは機動性を生かしたカエサル軍の小型船にやや有利だったようであるが、勝敗は容易に決せず、激しい戦闘が続いた。その時クレオパトラの船団約60隻が逃走を始めるのである。これがアントニウスの軍に敗北の徴候が現われたためなのか、ディオの言うように、たんに「女の、そしてエジプト人の特性にふさわしく、長い不安とどちらとも知れない結果への絶え間ない予期に耐え切れず」（50巻33節）、突然逃走を始めたのかは知る由もない。いずれにしても戦い半ばにしてクレオパトラの船は逃げ出したのであり、その後をアントニウスは追った。

アントニウスがクレオパトラを追った理由は何であったのか。プルタルコスが言うように恋人の弱み故に「すべてを忘れて」（66節）、その後を追いかけたのか、あるいはディオが推測するように「その逃走がまさにクレオパトラの命令によるものとは考えず、それらの者が味方が敗れたと思い怖気を振るって逃

げ出したのだと思い」(50巻33節)、その後を追いかけたのか、その間の事情もどれとは決し難い。しかし動機はどうであれ、クレオパトラの旗艦に追いついたアントニウスはそちらに乗り移ると、もはや戦場に引き返す意志はなかった。後に残された艦隊はその日の内に壊滅してしまう。拿捕された軍艦は300隻にのぼったという。陸軍はその後もよく抵抗を続けるが、一週間後には降伏し、指揮官カニディウスはエジプトに逃亡する。

以上のように見てくると、クレオパトラの逃亡およびアントニウスの逃亡はまったく予期できなかったような行動ではなく、ある程度下地があったことがわかるが、それでも彼は自分のために闘っている多くの兵士を置き去りにし、その信頼を裏切ったことには変わりない。彼のそれまでの伝記に示されているように、己の武勇と兵士への愛情によって信望のあったアントニウスにしては信じられないような行動であった。これはどうしてもクレオパトラの存在というものが彼の目を曇らせたためとしか考えようがないであろう。また当初考えられたように、彼の軍を本格的に立て直し再度の決戦に賭けることは、この失態によって事実上不可能となったのであって、彼がクレオパトラの船に乗り移った時、じつは自分の命脈を断ったに等しかったのである。

戦場を離脱したクレオパトラの船はペロポネソス半島の南、タエナルスの港に向ったが、その間3日間、アントニウスはクレオパトラとも会わず一人舳先に腰を下ろし、無言のまま頭を抱えていたという^①。タエナルスに着いた時、女官たちがはじめて二人を引き合わせて口を利かせ、食事をさせて寝かせたという(『アントニウス伝』67節)。

この二人の引き合せの場面は『アントニーとクレオパトラ』では3幕11場になっている。しかしながら、場所は必ずしもタエナルスに設定されているわけではない^②。11場では二人の引き合せの前に、プルタルコスが伝える、タエナルスでアントニウスが友人たちに財貨を与えて去らせたという話も盛り込まれて

いる。このことと、前の場の「彼らはペロポネソス指して逃げたのさ」(3・10・31)という言葉^⑧を合わせて考えると、場所の設定としてはタエナルスとしたところである。しかし、この場面にはすぐ続いて、シーザーのところ^⑨に和平の交渉使節を送らねばならないというアントニーの言葉 (Now I must/To the young man send humble treaties... , 3・11・61, 62) があり、さらにその後で使者に送っておいた子供たちの教師に戻ったということが出てくる (We sent our schoolmaster; /Is he come back?, 3・11・71, 72)。この家庭教師とは続く12場ではシーザーの陣営に現われて、アントニーとクレオパトラの使者としてシーザーに面会し、13場ではそれをアントニーに報告する人物に他ならない。そこで結局、11場全体はアントニーとクレオパトラがエジプトに帰着しての話とみる必要があるわけである。ところで、上の使者の件では、最初の言及においてはこれから派遣するような趣旨であったものが、次ではもう使者の帰還を待つ形になっている。もちろん、じつは最初から使者は送ってあったものと考えれば、それで辻褄は合うのであるが、注意深い人には一瞬意外な感がしないでもないと思われるのである。そしてここにシェイクスピアがタエナルスとアレクサンドリアとを合体して、歴史的時間を短縮させた苦心の跡が窺われると筆者には思われる。

(Ⅱ)

タエナルスから二人は対岸のアフリカのリビアに向った。クレオパトラをそこから海路エジプトに送ったアントニウスは後に残り、その地に置いた味方の駐留軍の将軍と接触を求める。ところが、頼りにしたその将軍はアントニウスを斥け、敵側に寝返ってしまうということが起きる。アントニウスは落胆のあまり、自殺を図ろうとしたが、友人に諫められやっとのことでアレクサンドリ

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

アに連れ戻されたという。エジプトに帰っても、傷心の癒えぬアントニウスは前回にも触れたように、ティモーンを真似て人を避け、ファロス島のほとりに建てた家に籠ってしばらく暮した。

やがて元気を回復すると、彼はクレオパトラに力を合わせて生き延びる方策を尽くすが、彼女が考えていた計画にはローマ軍を迎え撃つための防衛力増強はもとより、陸上を通して紅海側に艦隊を移動させることを試みたり、財宝を船に積み込んでスペインに脱出することなども含まれていた。しかし、こうした希望を持つ一方で、クレオパトラは囚人を用いて安楽死の方法を研究したと言われる。また、どこまで本気だったのかわからないが——たぶん、時をかせぐ意味もあったであろう——、二人はカエサルと和平交渉するべく使節を送ってもいるが、これが両者の関係に重大な危機をもたらすことになるのである。

二人は当時アジアにいたカエサルの許に使役を出したが、クレオパトラの方は自分の子供たちのためにエジプトの統治権を懇願し、他方、アントニウスはエジプトで、もしそれがだめならアテナイでも一私人として暮らすことを望んだ。カエサルはアントニウスの願いは無視したが、クレオパトラの分には返事を送ったという。ディオによるとカエサルは公にはクレオパトラに軍隊と王位の放棄を迫ったが、密かにアントニウスを殺すか追い出せば、エジプトの統治を認めるというような伝言をしたという（51巻、6節。ただし後半部は『アントニウス伝』73節にもあり）。これにはじつは、アントニウスには助命の仕様がなくとも、自分には同情してくれるかも知れないと考えて、クレオパトラはすでに内緒でカエサルに金の王笏と王冠を贈っていたという伏線がある（ディオ、同上）。カエサルもクレオパトラも共になかなかの策士であって、両者の関係には狐と狸の化かし合いの趣きがあるが、カエサルの狙いはクレオパトラを操って、アントニウスを倒し、クレオパトラを捕虜にし、そして特にエジプトの財宝をそっくり手に入れることにあったのは確かである。プルタルコス

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

によると、その使いに部下の一人で頭が良く、口も達者な男を送り出した。クレオパトラはこの人物との会見に特別の好遇を与えたため、アントニウスに疑念を起こさせることになり、怒った彼はこの使者をひどく笞で打たせて、カエサルに許に送り返した。このことがあって、クレオパトラはアントニウスの不信を晴らすべく、彼の機嫌を取るのに汲々としたという（『アントニウス伝』73節）。

さて上のアントニウスの反応だが、彼はカエサルに対して、「その男が傲慢で輕蔑的態度を私に取ったから、しかも、惨めな現状に怒りっぽくなっている時に」とその理由を伝えさせているが、もちろん、実際にはクレオパトラの日和見主義への怒りによるものと思われるが、さらに、何がしかの男性としての嫉妬心とでもいうべきものも感じ取られるかも知れない。

もし、この事件が真実であるとするならば、そこには明らかにクレオパトラのアントニウスに対する背信が含まれている。この行為の背後には、ある程度子供たちへの配慮もあったかも知れないが、より以上に彼女の保身や生存の欲求が作用していたことと思われる。この件の他にも、アクティウムでの行動などからも窺えるように、クレオパトラには本質的にわがままな性格が——その巧みな社交性の下に隠されてはいたが——、存在したものと思われる。これもクレオパトラのクレオパトラである所以であり、アントニウスがある意味では承知していた事であろう。もっとも、愛情ということではクレオパトラの背信だけを責めるのは片手落ちというもので、アントニウスも一時期クレオパトラを捨てて、オクタウィアと結婚していたことがある。

シェイクスピアはこのカエサルとの交渉の一件の結末を3幕13場に描いているが、簡単に言えば、そこではクレオパトラの心の揺れはディオの伝えるものほどではないが、プルタルコスの記述ほどあいまいでないとは言えよう。また、先のアントニウスの嫉妬心も明瞭に感じ取られる形になっているがこれは、カ

エサルと使者の双方に対するものであろう。

ところで、この件に関して『アントニーとクレオパトラ』には面白いことが2点ある。ひとつはクレオパトラにシーザーが送った使者の名前に関するものである。この劇の版本は第一・二折本が唯一の原典なのであるが、そこではこの男の名は“Thidias”となっている。ところがシェイクスピアが用いたノース訳の『アントニウス伝』では“Thyreus”なのである。そこで、かなりの数の編者が“Thidias”を誤りとして、“Thyreus”を採っているが、他方“Thidias”をシェイクスピアが意図的に変更したものとして、そのままの形を支持する編者もまた近年少なくない。このどちらが良いかは、きわめて判断の難しい問題である。というのは、こうしたいわば端役の名前については、第一・二折本はかなり杜撰であることを考えると、これも何らかの誤りによるものと類推されるのであるが、他方、この名前がト書きの外、本文中でも2度とも同じ形で出てくることを留意すると、たんなる誤植というような簡単な説明はできないのである。ところで、この“Thyreus”という名前自体にもじつは問題があり、ノースの版以外では、この名前は普通“Thyrus”（ギリシャ語 *Θυρεος*）と伝えられている^⑥。そこで、ノース訳を溯ってアミヨ訳を見ると、この名前は“Thyrée”となっている^⑦。アミヨはプルタルコスの人名のある程度のものをフランス語化しており、たとえば“Pompeius”は“Pompée”に、“Perseus”は“Persée”になっているが、“Thyrus”は“Thyrée”とはなり得ないはずであって、そこには何らかの誤りがあったのではないかと考えられる^⑧。（“Thyrus”を“Thyrée”とするつもりであったならば、“s”の脱落と考えられるが、“Thyr-sée”がフランス語的かどうかは疑問があろう。）そしてノースはこの形に基いて“Thyreus”としているので、結局、本文校訂の問題としては、“Thidias”を採るか、さもないければ“Thyrus”を採るのが妥当であると思われる。

もうひとつの点は、先に紹介した、アントニウスの怒りを招いたクレオパト

ラがアントニウスの気を引くために彼の誕生日をこの上なく盛大に祝ったという話についてである。シェイクスピアにおいてはこれが、盛大に祝われたのはアントニウスの誕生日ではなく、クレオパトラの誕生日ということになっている。下にその箇所を掲げるが、参考のため原文も添えることにする。

クレオパトラ

今日は私の誕生日です。

つつましく祝うつもりでしたが、いつものアントニーにあなたが
お戻りになったので、私もクレオパトラらしくいたしましょう。

(3. 13. 185~187)

Cleopatra.

It is my birthday,

I had thought t' have held it poor. But since my lord

Is Antony again, I will be Cleopatra.

もちろん、この程度の違いは作劇上の必要から、シェイクスピアが変更を加えたものと考えれば、それで済むはずであるが、実際にはこれが素材となった翻訳の微妙な言葉使いから生じているのではないかと筆者には思われるので、それを紹介することにしたい。

ブルタルコスではクレオパトラが盛大に祝ったとしているのはアントニウスの誕生日であることに間違いはないのであるが、ノース訳ではここが非常にあいまいになっている。対照のため、これと、ロエブ版のペリン (Bernadotte Perrin) 訳を並置しておく。

From thenceforth, Cleopatra to cleere her selfe of the suspicion he had of her, she made more of him then ever she did. For first of all, where she did solemnise the day of her birth very meanelly and sparingly, fit for her present misfortune: she now in contrary maner *did keepe it* with such solemnitie, that she exceeded all measure of sumptuousnes and magnificence

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

that the ghests that were bidden to the feasts, and came poore, went away riche.

(North 訳。イタリック体は筆者。)

After this, Cleopatra tried to dissipate his causes of complaint and his suspicions by paying extravagant court to him; her own birthday she kept modestly and in a manner becoming to her circumstances, but she *celebrated his* with an excess of all kinds of splendour and costliness, so that many of those who were bidden to the supper came poor and went away rich.

(Perrin 訳。イタリック体は筆者。)

ノースの訳では“did keep it”と言っているところの“it”の中味があいまいで、“the day of her birth”とも“the day of Antony's birth”とも両様に取れる可能性がある。文法的には前者が自然とも考えられるが、文の前後関係や、アントニウスの気前の良さで有名だったという記述などを考え合わせるとやはり後者と解釈するのが妥当であろう。この訳文のあいまいさが先のシェイクスピアの表現を生みだしたものと筆者は考える。ただし、ノースがなぜあえてこのような表現にしたのかは、アミヨの文章と較べてみるとこれまた、その理由がわかるように思われる。^⑩

De là en avant Cléopâtre, pour se purger des imputations qu'il lui mettait sus, et des soupçons qu'il avait encontre elle, l'entretint et le caressa le plus soigneusement et le plus diligemment qu'elle put: car tout premier, là où elle solemnisait le jour de sa nativité petitement et écharsement comme il convenait à sa fortune présante, au contraire, elle célébrait *le jour de la sienne* de telle sorte, qu'elle outrepassait toutes les bornes de somptuosité et de magnificence, en manière que plusieurs des conviés au festin, lesquels y étaient venus pauvres, s'en retournaient tous riches.

(イタリック体は筆者。)

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

もちろん、アミヨの訳でもアントニウスの誕生日を盛大に祝ったと解するのが正しいと思うが、ただ、“le jour de la sienne” というフランス語はどちらにも取れる表現であって、ノースはきわめて忠実にアミヨの文章を翻訳したというのではなかろうか。

(Ⅲ)

アクティウムの海戦後、ギリシャの諸都市を帰順させたカエサルはイタリアの暴動発生のため、一度帰国を余儀なくさせられている。これを平定した後カエサルがアジア方面からエジプトに向うと、彼の配下の將軍ガルスは西からアレクサンドリアに迫り、いよいよアントニウスとクレオパトラは土壇場に追いつめられる。アレクサンドリア間近に陣を張ったカエサル軍に対して一時、アントニウスが出撃して、撃退したこともあるが、これも大勢に影響を与えるには至らない。プルタルコスによれば、最後の日（前30年、8月1日）は次のようだったという。

次の日、夜明け前に町に接する丘に、残ったわずかな歩兵を配置し、そこで彼は彼の艦隊が港を出て敵の艦隊に攻撃しに行くのを見守った。彼はその兵士がどんな功績を挙げるかと同じと期待していた。しかし、船が敵に近づいた時、彼らはカエサル方に挨拶を送り、カエサル方もこれに答えて、すぐに両軍は合体し、町に向かって押し寄せてきた。アントニウスは部下が自分を棄てカエサルに就き、また歩兵も打ち破られ、敗退したことを知ると、クレオパトラのため戦ってきたのに裏切られて相手側に引き渡されるのだと叫びながら町に逃げ帰った。そこでクレオパトラはアントニウスの怒りを怖れて、建設させておいた霊廟に逃げ込み、戸口を閉ざし、中から門をかけた。そして使いをやって、アントニウスに彼女は死んだと告げさせた。

（『アントニウス伝』76節）

じつに波乱に満ちた一日だが、この後さらに、アントニウスはクレオパトラ

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

の死を信じて自殺を図ってしまう。クレオパトラの嘘の動機としては、上の記述からはアントニウスの怒りを宥めるためと読めるが、さらにそこへ、驚いたアントニウスを呼び寄せるためでもあったと考えられる。その事はプルタルコスの記事の続きの部分で、クレオパトラが別の使者を送ってアントニウスに霊廟に来るように伝えさせようとしたことが出てくることから明らかであろう。

そもそも、この霊廟に逃げ込んだこと自体、クレオパトラとしてはここをアントニウスとともに死に場所にする考えはあったと考えてもよいかも知れない。ディオなどはクレオパトラの嘘は、もっと意図的なもので、「もしもアントニウスが自分が死んだと聞けば後に残ることは望まず、すぐ死ぬだろうと考えて」(50巻10節)、自分の死を匂わせた伝言をさせたとしているが、少し穿ち過ぎの感がする。また、ディオ自身、クレオパトラが廟に入ったのはアントニウスを呼び寄せるためであったとも述べているので(同上)、その点とも矛盾があるようである。

すぐには死に切れなかったアントニウスはクレオパトラの生存を知ると、息も絶え絶えの状態でクレオパトラの許に運ばれる。その時、廟の扉は開けられず、中に入っていた女達の手で上の窓から綱によって引き上げられたという。話だけでも悲惨な場面であるが、もちろん、これはこのままの形でシェイクスピアの劇の中にも取り入れられている。プルタルコスではなぜクレオパトラがこんなことをしたか説明がないが、状況から考えられる理由としては、ひとつはカエサル側の兵が現われて捉えられることを恐れたこと、あるいは、この建物には多くの財宝が運び込ませてあったので、その略奪を怖れたことなどであろう。ただ、ディオはこの建物は一度戸を締めると開かない仕掛けになっていて、上の部分だけがまだ未完成であったということを言っている(同上)。

こうしてアントニウスはクレオパトラの腕の中で死ぬが、プルタルコスによれば、アントニウスはクレオパトラにそれが非難や不名誉を伴わないならば、

生き残ることを勧め、特にカエサル方にいたプロクレイウス（Proculeius）という人物を頼ることを勧めたそうである。とすれば、陰わしくなった二人の恋路の果てで、アントニウスは彼にもっともふさわしい美点、すなわち、心の大度を示して締めくくったことになる。

アントニウスの死後、クレオパトラはカエサルに簡単に捕えられてしまう。クレオパトラは衰弱死を図るが、それも、子供たちについて威嚇され果すことができなかったという。やがてクレオパトラはカエサルと直接会う機会を得るが、ディオはその時に彼女がカエサルの心を射止めようと手管の限りを尽したか長々と書いている（同12節）。そこにはかなり誇張もあると思われるが、プルタルコスにおいても、彼女が自分の魅力によってカエサルの心を捉える希望を持っていたことを窺わせることが書かれている。そして、それは大カエサルとアントニウスを恋人にしたクレオパトラにしてみれば自然の心理ではあっただろう。その時、クレオパトラはカエサルに対して、自分のした事の弁解を始めて、それらをアントニウスへの恐れの子供のせいだとしたが、カエサルの方は生真面目にも一々証拠を挙げて反論したという。するとクレオパトラはすぐに調子を変えて、いかにも生に執着があるかのように彼に憐れみを乞うのだが、実際にはもうこの時に彼女の前には道が閉ざされていることを悟ったに違いない。結局、生かしておいて凱旋の見せ物に使うとするカエサルの裏をかくて、クレオパトラは自殺に成功するが、その時、彼女にいいよ3日以内に子供と一緒にローマに送られるという事を教えてくれたカエサル側の人物がいた。その「若い男」（プルタルコス）の名はドラベルラ（Cornelius Dolabella 前回、前々回で触れた同名の人物の息子）と言い、プルタルコスの表現では彼女に「憎からぬ気持」を持っていて、そうしてやることを約束していたのだという。とするとカエサルの心を捉えられなかったクレオパトラだが、彼女が女としての魅力を失っていたわけではなさそうである。

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

ところで、シェイクスピアの劇では、アントニウスの死後はそれまでと対照的に、他の人物に対するクレオパトラの心の“揺れ”は見られず、アントニウスへの思慕が貫かれているところが特徴的である。シーザーとも会見する場面があるが、この時はすでにドラベラから彼の意図を聞いて知っており、また、言い訳のために自分の行為をアントニーへの怖れのせいにした話などはなく、これは先のサイディアスとの会見の場面に使われている。ドラベラにシーザーの意図を教えてもらう場面では、彼女に好意を抱いているこの人物と会った時も、容易に取り合わず、対応の仕方は非常に素っ気ない。この辺はシェイクスピアがクレオパトラの純粋な心境を強調しているようであり、プルタルコスの記事と比べてみると特に印象的である。もちろん、少し後の箇所では、ローマへの移送の事を教えてもらった後では、感謝の気持自体は十分表わすのではあるが。

(Ⅳ)

ところで『アントニーとクレオパトラ』の中に描かれたクレオパトラに関して、いかにもこの時代の背景を反映していると思われるひとつの特徴は、彼女が時にジプシーの概念と結び付けられているという点であろう。この劇で「ジプシー」という言葉は2度現われているが、ひとつは冒頭のファイロウのせりふの次の部分である。

かの武將にふさわしき心臓は……ジプシーの情欲をさますためのふいごや団扇になってしまった。

(1. 1. 6～10)

もうひとつは、アレクサンドリア港で味方の艦隊の寝返りに会ったアントニ

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

ーが、それをクレオパトラの裏切りのせいであるとして憤る場面においてである。

おお、この不実なエジプトの王よ！この怖ろしき魔女よ――、
眼差しひとつで私を戦に駆り出しもすれば、引き戻しもし、
あの胸こそわが王冠、最高の目標であったのだが、
まことのジプシーらしく、いかさま術で
まんまと私をたぶらかし、破滅の極みに誘ったのだ。

(4. 12. 25～29)

ここに「いかさま術」と訳出した表現 ‘fast and loose’ は紐を抜く手品のことで、ジプシーの大道芸のレパートリーを反映したものである。よく考えてみれば、クレオパトラの時代には、ジプシーと呼ばれるようになった民族はまだいなかった、あるいは少なくとも知られてはいなかったから、これはシェイクスピアによくあるアナクロニズムの一種ではあろう。また、こうしたことと言えば、実際はジプシー民族（ロマニー）はエジプトとは関係なく、言語的にも人種的にもヒンズー系でインドが出身地とする考え方が有力であるので、クレオパトラをジプシーと結び付けることは別の意味でも誤りと言えるであろう。しかし、シェイクスピアの時代にはジプシーとエジプト人は普通に結び付けて考えられたし、クレオパトラとも連想が働いたようである。そこで、ここでは簡単にクレオパトラとジプシーの概念との結合の背景を探ってみることにしたい。

まず、「ジプシー」(Gypsy, Gipsy)という言葉であるが、「オックスフォード英語辞典」(OED)によれば、これは元来、“Egyptian” から由来しており、それが“Gyptian”, “Gypsen” などの形になり、さらに “Gypsy, Gipsy” と変化したものだという。このように彼らが最初「エジプト人」と呼ばれた理由は彼らが英国などに入ってきて来た時、エジプトからのキリスト教巡礼者と称したから

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

らしい。^⑩ジプシーが英国に入ってきた時期は正確なところはわかっていないが、大体15世紀から16世紀の初めにかけてのことだろうとされている。彼らの生活様式は集団で放浪的な生活をし、行先では変った衣裳で曲馬や手品、音楽、踊り、などの芸や占いなどをしていたことが知られている。しかし、次第に彼らの放浪性や盗みなどの傾向などから悪評を生じるようになり、新しく作られた法律によって、きびしい弾圧を受けるようになった。それでもやはり、彼らの存在や生活様式が人々の好奇心をそそり、また、その自由さ故にある意味ではロマンティックにも思える存在であったのも事実である。

したがって、エリザベス朝やスチュアート朝の文学にはジプシーに対する言及が少なくないのも当然のことであろう。中でもベン・ジョンソンの仮面劇『ジプシーの変身』(*The Gypsies Metamorphosed*)などは、ジプシーを主題とした形となっており、ジプシーの生活への言及も多い。

シェイクスピアの劇にもジプシーの生活に関連する箇所がないわけでもない。『お気に召すまま』では、歌を始めようとする小姓が「そうとも、そうとも、馬に合乗りのジプシーよろしく調子を合わせて」(5. 3. 15~16)というところがある。また、この劇では“*duc dame*”(3. 5. 56)という正体不明な言葉が歌のリフレインに出てくるが、これはジプシーの使うロマニー語の“*ducramē*”(私は予言する)から由来しているのではないかという解釈がひとつの有力な説になっているが、もしそうだとすると、上のどちらの言葉もジプシーの生活の特徴的な面を反映していることになる。

ジプシーがエジプト人と同じならば、クレオパトラがジプシーと結び付けられるようになるのは理の当然であるが、事実、この発想は当時それほど珍しくはなかったようである。たとえば、先の『ジプシーの変身』には「ジプシーの祖母、女王クレオパトラ」(And Queene Cleopatra, /The Gipsyes grandmatra)という文句があるし、^⑪シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』で

は「ダイドーは墮落女で、クレオパトラはジプシー」(Dido a dowdy : Cleopatra a gipsy) というマキューシオの軽口がある (2. 4. 43)。こうして見ると、『アントニーとクレオパトラ』でクレオパトラがジプシーと呼ばれることがあっても、それほど驚くべきことではないことが理解できる。ただし、注意すべきことはこれらの表現はシェイクスピアではいずれも揶揄や非難の調子で使われており、彼が歴史のへだたりを無視して、どの程度本気にクレオパトラをジプシーと結び付けていたかは疑問の余地があるということである。先にアナクロニズムと言ったが、これは実際はごく意識的なアナクロニズムであるかも知れないのである。このような視点から見ると、この章の冒頭に紹介した4幕12場の「まことのジプシーらしく」(Like a right gipsy) という表現に、「本当のジプシー同様」という意味も浮び上って来ないわけではない。

以上はクレオパトラとジプシーの直接的関連であるが、この他により間接的な関係として考えるべき可能性のある問題がある。それはクレオパトラについて、魔術に関する表現の使用が多いことである。先の引用の中の「この怖ろしき魔女」(this grave charm) もそうであるが、その他にも「この魔法使いの女王」(this enchanting queen, 1. 2. 132)^⑧、「恋のすべての魔力」(all the charms of love, 2. 1. 20), 「妖術」(witchcraft, 2. 1. 22), 「彼女の魔術」(her magic, 3. 10. 19), 「私の魔女」(my charm, 4. 12. 16), 「この魔法使いめ！」(thou spell!, 4. 12. 31), 「あの魔女」(The witch, 4. 12. 47) などがある。もちろん、アントニウス以前にも大カエサル的心を捉え、その恋人になっていたクレオパトラが不思議な魔力を具えた女性と考えられるのはごく当然のことではあるが、他方、英国のジプシーは手品や占いとともに魔術の類を行っていたので、この連想がシェイクスピアの創作に作用しているという面があるかも知れない。因みにシェイクスピアにおいて、エジプト人と魔術との連想があったことは、『オセロ』の中のあの有名なハンカチによって明らかになっている。

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

オセロ

あのハンカチは
あるエジプト人が母に呉れた物、彼女
は魔術師で、人々の心をほとんどみな
読んだ……。

(3. 4. 55～58)

この「エジプト人」(Egyptian) がジプシーを意味しているものかどうかは、
どちらとも言いかねるが、シェイクスピアの頭の中ではエジプトが神秘的な異
国であったとは言えるであろう。

(1981年6月)

注

- ① 正確に言えば、追いかけて来た敵の船一隻を追い払った時を除いてということになる。
- ② この劇は第一・二折本には幕場割りと同様、場所指定もない。
- ③ この場合、To the sea-side straightway” (3. 11. 20) という言葉があるが、これは港町タエナルスでも不可能ではないであろう。
- ④ J. D. Wilson はシェイクスピアが役者の発音の便宜のため変えた可能性を示唆している。New Cambridge 版, *Antony and Cleopatra*, p. 125 参照。しかし、これには異論もある。
- ⑤ たとえば、Canidius が Camidius, Camindius などとなったり、Ventidius が Ventigius となっている場合がある。この他にも、例は少なくない。
- ⑥ この点は New Cambridge, New Arden, New Clarendon などの各版に指摘がある。
- ⑦ アミヨの訳は、Plutarque : Les vies des hommes illustres, tome II, (Bibliothèque de la Pléiade) に基いた。
- ⑧ アミヨはギリシャ語の版本を集めて独自に校訂したため、彼の底本を示すことはできない。
- ⑨ ロエブ版のギリシャ語の原文を参考のために示す。

ἐκ τούτου Ἰλίοπάτρα μὲν ἀπολυμένη τὰς αἰτίας καὶ ὑπονοίας ἐθεράπευεν αὐτὸν
περιττῶς. καὶ τὴν ἐαυτῆς γενέθλιον ταπεινῶς διαγαρούσα καὶ ταῖς τύχαις
πρεπόντως, τὴν ἐκείνου πᾶσαν ὑπερβαλλομένη λαμπρότητα καὶ πολυτέλειαν ἑώρ-
τασεν, ὥστε πολλοὺς τῶν κεκλημένων ἐπὶ τὸ δεῖπνον πένυτας ἐλθόντας ἀπελθεῖν

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

πλουσίως.

- ⑩ 前掲書の p. 937 より引用。
- ⑪ 以下、ジプシーの記述については、D. B. J. Randall : *Jonson's Gypsies Unmasked*, Duke Univ. Press, 1975, pp. 47~66, C. H. Ward-Jackson *et al.* : *The English Gypsy Caravan*, David & Charles, 1972, p. 20, 及び Ben Jonson : *The Gypsies Metamorphosed*, (Oxford at the Clarendon Press edition), 1941, などに基いた。
- ⑫ Charles Strachey 氏の説。New Cambridge 版, *As You Like It*, p. 128 に紹介されている。
- ⑬ Ben Jonson の前掲版の173, 174 行。
- ⑭ “enchanting” は「魔法をかける」という本来の意味で使われていた。